
バルザック『農民』

——ロヴァンジュール子爵の研究による文献学と解釈学のレッスン——

鎌田 隆行

〈信州大学〉

本発表は、このような題名ではあるものの、文献学と解釈学の深い相互影響の関係を理論的に考察するという野心をいささかも持つものではなく、バルザックの晩年の作品で未完の『農民』を再び見直そうというに過ぎない。より正確に言うならば、バルザック研究の先駆者であるロヴァンジュール子爵がかつて同作品に関して行った、重厚かつ現在もなお意義深い研究を再読してみようというものである。こうしたメタ読解によって、生成論的な再構築や解釈の挙措に関して再考すべきいくつかの方法論的・批評的論点が明らかになると思われるのだ。

『農民』の概要

同小説はバルザックの他の名作ほど一般に知られていないながらも、イデオロギーに特に関わるその複雑な意味作用のため、重要な評釈をしばしば呼び起こした。意味作用に富み難解なこの小説について、忠実でまとまりのある要約がはたして可能かどうかは定かではないのだが、ロヴァンジュール子爵の著作に準拠して細部を検討する前に、現行の校訂版に見られる物語のあらすじをまとめ、作品の主要な生成段階を整理しておこう。

主軸となる筋立ては1820年代前半に置かれ、エーグという美しい領地が舞台となっている。エーグは架空の土地であるが、ブルゴーニュ地方に位置するとされる。モンコルネ將軍（伯爵）によってここが買収された。裏帳簿によって横領を続けていた管理人ゴーベルタンは以前の地主ラゲール嬢の死後、自らこの土地を入手しようと考えていたので目論見がはずれたのであった。モンコルネ夫人は愛人であるジャーナリストのエミール・ブロンデをこの地に招き、ブロンデは爽快な滞在の様子を同業者である友人ナタンに伝える。ところが、一見朗らかな田園にしか見えないこの土地は、実は地元の農民によって日常的に収奪されていることが明らかになる。モンコルネ伯爵は地所の管理を厳格化するため、依然として使い込みを続けていた管理人のゴーベルタンを追放するが、ゴーベルタンやその仲間のブルジョワたちが農民に反乱をけしかけ、騒擾はやまない。農民たちの不法行為はさらにエスカレートし、忠実な番人のミショーを殺害するに至る。憎悪に満ち狡猾な不屈の敵陣に悩まされ続けた伯爵は、自分の側が敗北したことを悟り、元値割れで土地を手放す。十数年後、伯爵は死去し、富裕な未亡人となった夫人は当時絶望の淵にあったブロンデの妻となる。ブロンデはその後知事に任命され、夫妻はエーグの地に立ち寄るが、そこでは土地の極度の分割化が進み、往時の美しさは失われていた。

この作品はきわめて波乱に富んだ生成過程から生まれている¹。1833年末、バルザックが全盛期に創作ノ

1 テキスト生成の過程と異文の詳細についてはティエリー・ボダンによる同作品の版本の注解を参照のこと（Balzac, *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976–1981, 12 vol (以下 *Pl* と略), t. IX)。

トとして使っていた『思考、主題、断片』に『土地は争いの種』という作品の計画が記されている。これが本作品の誕生の場である。既にこの時点で農民による土地の収奪や、番人の暗殺といった血なまぐさい場面を含むストーリーが企画されていた。この作品計画はその後、大貴族とそれに対抗する地元のブルジョワ集団の激しい抗争を描く予定で1835年に18枚の下書きが書かれた『大地主』を包摂していく。

バルザックが同作品の初稿に着手するのは1838年であるが、『農民、あるいは土地は争いの種』、続いて『農民』と改題されたこの作品を連載小説として掲載する新聞を見つけるに至らなかった。その後1839年秋に、作品の版權を得たスヴラン社で校正刷りが作成されている。

1841年から42年にかけて『ル・メサジェ』紙での刊行計画があり、校正紙も刷られたが、作者の作業が進まず、頓挫している。1842年11月には『藁葺家屋と城館』という一時的な題名のもとに銀行家で仲介業者のロカントとの契約が結ばれるも、刊行の実現に至っていない。1843年も停滞状態が続いている。1844年9月、バルザックはようやく『ラ・プレス』紙との契約を編集長アレクサンドル・デュジャリエから得て、本格的な制作に取り掛かる。体調不良から何度か作業の中断はあったものの、11月11日の献辞の掲載を皮切りに、『土地は争いの種』の題名のもとに作品の第一部を13章、16日分の連載で12月3日から21日まで掲載した（8、9日は休載）。ところが編集部の意向によって掲載はそこで中断され、デュマの『王妃マルゴ』に場を譲った。結局、1850年8月の死に至るまでこの作品に関してはバルザックの苦しい低迷状態が続き、全体の四分の一しか実現できていない。

わずか四か月の結婚生活の後に未亡人となったハンスカ夫人はシャンフルリやシャルル・ラブーに協力を依頼して断られた後、結局、自分でこの作品に手を加えることにし、バルザックが残した断片を利用しながら二年後に完成させた。こうして補完された作品は『ルヴュ・ド・パリ』紙に1855年4月1日から6月15日まで掲載され、また同年、単行本としてド・ポテール社から刊行された。

ロヴァンジュール子爵の先駆的貢献

このような問題含みの作品は早くからロヴァンジュール子爵の目に留まっていた。フランドルの名家出身で若い頃から文学愛好家であった子爵は、パリの書店主ミシェル・レヴィの薫陶のもとで学識を身につけた。以後、莫大な資産を背景に、バルザックをはじめとし、ジョルジュ・サンド、テオフィル・ゴーチエ、サント＝ブーヴらといった、自らが好むロマン主義時代の作家の資料を大量に収集していくことになる。その膨大なコレクションは今日ではフランス学士院図書館に所蔵されている²。

自筆草稿や作者が修正した校正刷りなどの徹底した資料収集と長年にわたる仔細な調査により、子爵は1901年にオランドルフ書店から刊行された著作『バルザックの小説の生成——『農民』』でこの小説のテキスト生成過程の多くの詳細を明らかにした³。これは同小説に関する現代の注解の基礎文献となっている。また、しばしば指摘されるように、genèseの語が文学作品の生成という意味で用いられた最初の事例である⁴。

この先駆的な著作をより詳しく見ていこう。全体の構造は小説の生成を時間軸に沿って跡付けるように組み立てられている。第一部の「事前」では、最初の主題の着想から『大地主』の統合を経てテキスト化に至

2 Catherine Faivre d'Arcier, *Lovenjoul (1836-1907). Une vie, une collection*, Kimé, 2007を参照のこと。子爵のコレクションについては拙稿「ロヴァンジュール文庫」（田口紀子・吉川一義（編）『文学作品が生まれるとき——生成のフランス文学』、京都大学学術出版会、2010, pp. 142-144）を参照されたい。

3 ロヴァンジュール子爵はこれ以前にバルザックに関する重要な書誌研究である *Histoire des œuvres de H. de Balzac*, Calmann-Lévy, 1879を上梓している。

4 Roger Pierrot, « Un pionnier des études génétiques. Le vicomte de Lovenjoul et *Les Paysans de Balzac* », *Genesis* 5, 1994, pp. 167-173 および Thierry Bodin, « Esquisse d'une préhistoire de la génétique balzacienne », *L'Année balzacienne*, 1999 (II), p. 467を参照のこと。

るまで——同書の内題がいみじくも示しているように、バルザックにとってはまだ創作の最初期段階に過ぎない——のプロセスが記述されている。それに続く「事中」は作品の推敲作業——この作家においては執筆と修正の交互の反復となる⁵——と出版戦略の紆余曲折を論じている。第三部の「事後」は、主として作品の未完状態の原因と結果を考察している。子爵の研究の論述スタイルの特徴はその例外的ともいえる資料収集のリソースに由来しており、バルザックの書簡や未刊行テキストなどを長く引用している。

特に注目すべきは、常に子爵の作業の指針となっている資料収集の網羅性という原則である。歴史的コンテキストや作家の実生活に関わる情報を考慮に入れた上で、今日では「前＝テキスト」と呼ばれるもの一式——作品計画の素描、草稿、校正刷り、雑誌・新聞刊行版、版本（この作品に関しては作者没後の刊行）、パラテキスト群（書簡、刊行予告等）——を検討しているのである。例えば、子爵は1844年の本格的な執筆に先立って刷られたこの小説の最初の校正刷りを一種の「草稿」として検証しているが、このことは、印刷物が絶えず草稿と化していくこの作家の特異な制作プロセスを踏まえている。なお、ステファンヌ・ヴァッションはバルザック自身がこのような言い方を用いていることを記している⁶。ことほどさように、バルザックの生成研究の源流は二十世紀初頭にあったと言っても大げさではないのである。

しかしながら、特に未完の問題をめぐることは、現代の生成論の一般的見解と齟齬する論述の諸要素も散見される。それは当時の前提事項に影響された注釈や、今日の生成論的研究では許容されない逸脱の見られる解釈といったものである。それを断罪しようというのではない。以下ではそうした示唆的な点をもとにして、いくつかのキー概念の再考を行いたい。

二つのレッスン

1. 伝統的研究の有効性

『農民』の生成資料に抗い難く刻印を残している未完という現象は、子爵の著作において否定的に捉えられており、頓挫の原因は主として外的要因に帰せられている。子爵によれば、バルザックは終始この小説を完成させるに足る気力と創作意欲を持っていたのだが、ハンスカ夫人がたえず引き起こすプライベートな気苦労によって持続的な作業が妨げられたというのである。

ハンスカ夫人は、労作をパリの日刊紙に掲載するのに必要となるパッシーの自宅での仕事を全く顧みることなく、練り上げに6週間から2ヶ月はかかる作品計画を妨害し続けた。1849年、1850年の完全な活動停止に先立つ、1844年～48年にかけてのこの大作家の痛々しいペースダウン、比較的限定されてしまった作品制作は、この唯一の原因によるものである⁷。

また子爵は、いかにも予想されることではあるが、浪費家の作家を悩まし続けた債権者についても触れている⁸。こうした限りにおいて、子爵はある種の伝統的な創作観から自由ではなく、作品の進展を阻む、外的で多くは物質的な障害物を断罪するに至っているのである。

この点では未完作品をめぐる再評価、さらに価値転倒を公準とする現在の生成批評との差異は大きいように見える。生成批評は、未完作品をそれだけでは無価値な「失敗作」とみなすのではなく、エクリチュールの一つの自立した存在様態であると捉える。特に書記物がその永続的な活性化運動によって固定的な形式に

5 拙著 *La Stratégie de la composition chez Balzac. Essai d'étude génétique d'Un grand homme de province à Paris*, Tokyo, Surugadai-shuppansha, 2006, pp. 34-36を参照のこと。

6 « *La Même histoire d'une femme de trente ans* : "J'ai corrigé l'édition qui sert de manuscrit" », in *Balzac, La Femme de trente ans "Une vivante énigme"*, SEDES, 1993, pp. 5-16.

7 *Op. cit.*, pp. 193-194.

8 *Ibid.*

還元されるのを拒む、本質的な超越運動の現象が強調されるのである⁹。

実際、未完は新しい生成批評にとって非常に特権的かつ戦略的な陣地である。というのも、解釈学にしても旧来の文献学にしても、必然的にテキストの完全性を求めるわけであり、そうした先行する方法論との差別化が可能になってくるからである。ところが生成批評は、いわゆる「完成した」作品に対しても、潜在的に可能なヴァージョンの中の一つであるとして、「最終版」の概念をしりぞけ、それによって旧来の方法論と距離を置く¹⁰。だが逆に考えるならば、ここには自分だけの陣地を確保しようという際立った強迫観念が見られ、あたかも自らの独立性が常に他の方法論との競合によって大きく脅かされているかのようでもある。

実のところ、今日までに生成批評が、自らが達成したと主張する理論的刷新に比肩しうるほどの実際の有効性を方法論的次元で証明しえたかどうかはそれほど明白ではない。その逆の論証として、今日の批評家にはあまり説得的でない理屈付けが存在するにもかかわらず、子爵による作品の生成的布置の描写は、未完の複雑なメカニズムを持つダイナミズムを相当に浮き彫りにしているのである。例えば、子爵は同作品におけるもともとの二つの異質な計画の融合を指摘する——ブルジョワ的な凡庸政治に対する批判と農民階級の危険性の告発である。問題含みのこの衝突は小説の企画を困難なものにした可能性がある¹¹。さらにまた、子爵はバルザックと『ラ・プレス』編集部の上のトラブルを仔細に叙述している。『ラ・プレス』編集部はバルザックに対して軌道に乗ったばかりの作品の掲載の中断を強要し、代わりにデュマの『王妃マルゴ』を連載した。バルザックの小説に不快感を受け、定期講読をやめた多くの読者たちの反応によって極めて神経質になった編集部にとって、デュマのこの小説の方が採算性が高いと思われたからである¹²。読者と戦術的な編集者の影がその背景に広がるこの中断の影響は小さなものではない。というのも、バルザックが独自に練り上げた、校正刷りを大幅に用いる創作プロセスが十全に機能するためには、出版の展望と、多かれ少なかれ持続的な創作の勢いが併存していることが求められるからである¹³。

だがこの領域では子爵の労作のみが例外的なものではない。例えば、バルザックの草稿研究が活発になっていった1950～60年代に関し、シュザンヌ・ジャン・ベラルの『幻滅』1837年版の徹底した分析(1961)や、高山鉄男によるバルザックの未完作品に関する精密な調査(1966)といった学術貢献は¹⁴、たしかに伝統的な草稿研究の公準に依拠してはいるものの、その刊行年代にもかかわらず、より一層参照されるべきではなかろうか？ こうした研究が依然として際立った重要性を保っていることが意識されるようになったのはごく最近のことにすぎない¹⁵。既に無効となった概念に依拠しているという理由で自分たちの遠い先行者の業

9 Louis Hay, « Le manuscrit inachevé », in *La Littérature des écrivains*, José Corti, 2002, pp. 245–256を参照のこと。他方、今日のバルザック研究では1840年代中盤以降のこの作家の創作生活全般の動きは、『人間喜劇』の枠組みにおいて中断されていた小説の完成に有利なものではなかったことが強調されている。それは創作意欲の枯渇 (Schuerewegen) や演劇への方向転換 (Mozet) という仮説によるものだが、いずれにしても子爵の主張とは異なる立場である。Franc Schuerewegen, *Balzac, suite et fin*, ENS Éditions, 2004, p. 49; Nicole Mozet, « 1848 : après *La Comédie humaine*, le théâtre ? Les lettres à Mme Hanska comme paratexte », in Roland Le Huenen et Andrew Oliver (dir.), *Paratextes balzaciens. La Comédie humaine en ses marges*, Toronto, Centre d'études du XIX^e siècle Joseph Sablé, 2007, pp. 172–173を参照のこと。

10 Almuth Grésillon, *Éléments de critique génétique. Lire les manuscrits modernes*, Presses Universitaires de France, 1994, p. 8を特に参照のこと。

11 Lovenjoul, *op. cit.*, p. 7 sqq.

12 *Ibid.*, pp. 227–228. 特に、モンコルネ伯爵の人物描写から不快感を受けた軍人の読者たちがそうである。

13 もっとも、この小説家は中断にもかかわらず作品計画を実現したことが一再ならずある。『幻滅』や『娼婦盛衰記』のケースが思い起こされよう。検討可能な他の未完の理由については Sigbrit Swahn, *Le Pourquoi du récit. Étude d'un roman inachevé de Balzac*, Les Paysans, Uppsala, Uppsala University, 1999, ch. I で指摘されている。

14 Suzanne Jean Bérard, *La Genèse d'un roman de Balzac : Illusions perdues (1837)*, Armand Colin, 2 vol., 1961; Tetsuo Takayama, *Les Œuvres romanesques avortées de Balzac (1829–1842)*, Tokyo, The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1966.

15 例えばステファヌ・ヴァッションは最近、ベラルの業績が持つ射程を強調している (« Balzac, la science et Flaubert », in Jacques Neefs (dir.), *Savoirs en récits II*, Presses Universitaires de Vincennes, 2010, p. 41)。また、拙論「バルザックの生成論的研究——問題点と展望」, 日本フランス語フランス文学会中部支部『研究報告集』第34号, 2010, pp. 33–52も参照のこと。

績をしばしば軽視している新しい生成研究がもたらした成果によって、伝統的な生成研究が凌駕されたというのは本当に確かなのだろうか？ 以上が子爵の著作から引き出せる第一の教訓である。

2. 自由な解釈者の肖像

第二の論点は大きく次元を異にする。

小説のパラテキストに明示されていることからしても、バルザックがここで農民に代表される民衆階級を批判する意図があったことはよく知られている。代訴人ガヴォーに宛てた献辞に見られるバルザック自身の表現によれば、農民は「不屈の侵食者で、土地を細分化し、分裂させる破壊者」である¹⁶。また1844年10月、ハンスカ夫人宛てに、この小説は「民衆と民主主義に対抗する」ものであると伝えている¹⁷。だが、作品はこの点に関してパラドクシカルな注釈者を持つことになる。マルクス主義批評家のルカーチやマシュレは『農民』を特権化し、この作品はその表象の力によって、作者の反動主義的意図に反し、実際には農民を自らの利益のために操作する支配階級を断罪するものとなっていると論じた。実のところ、これはバルザックの作品全体にはからずも進歩主義者となった作家の姿を見て取ったユゴーやゾラ、そしてマルクスやエンゲルスにならうものだ¹⁸。

ロヴァンジュール子爵の方は、一見したところ文献学者として論を進め、小説に対する掘り下げた解釈を控えているように見える。しかし、見方を変え、既に述べたハンスカ夫人によって作業が阻害されたという子爵のテーゼを作品の結末の問題に関連付けるならば、事実はそうとも限らない。

既に見たようにバルザックは四部八巻を要するはずの作品計画のうち、約二巻分に相当する『ラ・プレス』掲載ヴァージョンというごく一部しか実現できなかった。作者の没後、未亡人のハンスカ夫人は、十分に進展していなかった第二部に特に手を加えて内容を補足した。そこで問題になるのが、ハンスカ夫人が取って付けたように第二部の末部に配置した、小説の結末——「一種のシナリオ」とロヴァンジュールは呼んでいる¹⁹——は誰によって書かれたのかということである。子爵は、絶望の淵にあるブロンデ、モンコルネ夫人からの黒のシーリングの手紙の到着、二人の結婚、エーグ再訪の場面を描くこの箇所は主として作者に由来するものであり、作者は自分自身の結婚がどのようになるかを予見し、小説に個人的側面を与えたのだと仮定している——バルザックは実際、1841年11月にハンスカ夫人から黒のシーリングのほどこされた手紙を受け取っている²⁰。「ここでもまた、この偉人はかつてもしばしばそうであったような「幻視者」ぶりを発揮している！」と子爵は書いている²¹。だがティエリー・ボダンが記している通り、自殺を考えるジャーナリストの肖像の部分を除くと、この結末がバルザックの手によるものだという証拠は何もない²²。以下に見る、エーグの分割化に驚くブロンデ夫妻の会話からなる小説の末尾の部分重要な意味合いを持つだけに、書き手の確定ができないことは非常に残念ではある。

「これが進歩だ！」とエミールは叫んだ。「ジャン＝ジャックの『社会契約論』の一ページさながらだ！ 僕はこんなふうに動いている社会機構に縛りつけられているわけだ！ やれやれ！ そのうち、諸国の王はどうなってしまおうのだろう。また、こんな状況では五十年後、諸国家はどうなっていることやら

16 *Pl.*, t. IX, p. 49.

17 *Lettres à Madame Hanska. Textes réunis, classés et annotés par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 2 vol., 1990, t. I, p. 917.*

18 ジョエル・グレイズはこうした「バルザック対バルザック」の系譜を跡付けている (Joëlle Gleize, *Honoré de Balzac*, Nathan, 1994, pp. 71-77)。

19 *Op. cit.*, p. 239.

20 *Ibid.*, pp. 318-322.

21 *Ibid.*, p. 322.

22 *Pl.*, t. IX, « Notes et variantes », p. 1394. ボダンは「小説のこうした最終行に関して、我々は資料を一切所有していない。これは1838年に書かれたものだろうか？ バルザックは結末の新しい計画を残していたのだろうか？ この結論はバルザック夫人のみによるものなのだろうか？」と記している。

……。」

「あなたは私を愛してくれて、私のそばにいてくれる。この現在というものが素敵に思えるわ。遠い未来のことなんて気にならない」と妻が彼に答えた。

「君のそばでは、現在万歳だ！」と妻に惚れ込んでいるブロンデは陽気に言った。「未来なんてどうにでもなってしまえ！」。そして彼は御者に出発するように合図し、馬が駆け出すと、新婚夫婦はハネムーン旅行に戻った²³。

子爵の仮説に照らし合わせるならば、彼が資料的根拠なしに作者に帰しているこのページには、作者の運命だけでなく、作品の運命もまた書き込まれていたと考えることができよう。未練を残しながらもこの変わり果てた土地を後にし、かねてからの最愛の女性との結婚生活に入るブロンデの姿に、「社会機構」の機能不全ぶりを描き出すべきこの小説がまだ制作途上で変容を重ねている途中であるのにエーヴ・ハンスカ夫人のために放棄してしまうバルザックの姿が見て取れるのである²⁴。

この碩学の批評家はもちろん反映性や紋中紋といった用語で語っているわけではない。しかし、そうしたものが彼の著作の中に、大方の予想に反しつつ、またまるで不法侵入しながらに姿を現し、ピエール・バイヤールが「先行する剽窃」²⁵と呼ぶもののようなやり方で現代批評に呼応してくる。今もなお示唆的である謹厳な文献学者の傍らに、大胆で躍動する想像力を持った解釈学者が存在しているのではなかろうか。

23 *Ibid.*, p. 347.

24 ポール・プティティエは、この小説に描かれた土地の変貌は『人間喜劇』の変容に重なり合うものだとしている。Paule Petitier, « *Les Paysans, une anamorphose de La Comédie humaine* », in Claude Duchet et Isabelle Tournier (dir.), *Balzac, Œuvres complètes. Le « Moment » de La Comédie humaine*, Presses Universitaires de Vincennes, 1993, pp. 269–279を参照のこと。

25 Pierre Bayard, *Le Plagiat par anticipation*, Éditions de Minuit, 2009.